法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

対戦相手からのラフプレイ(身体的攻撃・言語的攻撃・敵意)によって誘発された攻撃性の発現過程

千葉, 陽子 / Nakagomi, Shiro / Chiba, Yoko / 中込, 四郎

(出版者 / Publisher)
法政大学スポーツ研究センター
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学スポーツ研究センター紀要 / 法政大学スポーツ研究センター紀要
(号 / Number)
36
(開始ページ / Start Page)
59
(終了ページ / End Page)
67
(発行年 / Year)
2018-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00014563

法政大学スポーツ研究センター紀要　36. 59-67（2018）

対戦相手からのラフプレイ（身体的攻撃・言語的攻撃・敵意）によって誘発された攻撃性の発現過程

Expression process of aggression induced by the rough play（physical aggression，verbal aggression，hostility）of the opponent

千　葉　陽　子（法政大学経済学部・非常勤講師）
Yoko Chiba
中　込　四　郎（国士舘大学・特任教授）
Shiro Nakagomi

要　旨

本研究では，コンタクトスポーツ競技者の被攻撃から攻撃性発現までの内的過程を検討した。千葉・中込（2017）は競技者の攻撃性を「感情の統制の有無」,「攻撃性の表出の有無」の２つの視座から「戦略型」,「達成型」,「抑圧型」,「衝動型」の４つの攻撃性タイプに判別するスポーツ版攻撃性検査を開発している。その検査によって各タイプに該当し，且つチームの指導者による選定といった外部指標により抽出された各攻撃性タイプを顕著に表す者に対して，被攻撃から攻撃性発現過程について面接調査を実施した。その結果，相手のラフプレイによって誘発された攻撃性を達成行動へと建設的に変換するためには，相手の行動に「悪意を感じ取らないこと」，そして過去に起きたことに縛られない「未来への視点」が重要であることが示唆された。

キーワード：攻撃性，コンタクトスポーツ，統制，意図
Key words : Aggressiveness，Contact Sport，Control，Intention

1．はじめに

日常生活で穏やかな人が，コートの中では別人のように攻撃的な振る舞いをみせることがある。それはおそらく，スポーツの「ルールや場」が守りとなり，彼らの特性レベルでの攻撃性が発現しやすくなるのだろう。激しい身体接触がルールに内包されているスポーツをコンタクトスポーツと呼ぶ。荒々しい接触プレイは，時にルールに抵触するような不当なプレイ（以後，ラフプレイと呼ぶ）となり，競技者の攻撃性を喚起する（Kerr, 2004）。同じような状況下における競技者の反応は，２つに大別されるようである。攻撃を受けてから自身の攻撃性を競技にうまく活かせるものとそうでないものである。前者は，対戦相手の攻撃に影響され自分自身のプレイができなくなる一方で，後者は相手の攻撃に惑わされず自分自身のプレイに徹する。それでは，両者の被攻撃から攻撃性発現までの内的過程にどのような違いがあるのだろうか。

元来，攻撃性はネガティブなパーソナリティ要因として位置づけられ（Keeler, 2007；Dehghani & Behtaj, 2012），「心理的な健康や良好な状態とはほとんど関係のない，否定的ないし反社会的行動として定義する統一見解がある」（B. クラーエ , 2004）とされている。そうした立場から実際に欧米では，ジュニアユース選手の攻撃行動を抑制する介入プログラムが報告されている（Abrams, 2010）。その中の一つであるアイスホッケーの選手の事例では，どのような時に怒りが発現するかを分析したところ，「喉を突かれるとスイッチが入ったように怒りが湧き出してくる」ことを語った。その対処として，スイッチが入ったときはリラクセーション技法として呼吸法を実施した後に，心の中で「落ち着く，落ち着く」と積極的思考を唱えるようにし，徐々に同様の場面における攻撃行動がなくなっていったようである。しかしながら，このような対処法では，攻撃性を抑えることが目指され，それをうまく競技に活かすような視点は存在しない。そのため，競技の推進力となっている攻撃性もが無分別に抑えられてしまうことが危惧される。

一方で，心理臨床領域においては，攻撃性という概念は，人間が生きる基盤となるエネルギーとは何かという問いを出発点として扱われている（安立，2003）。岡田（2001）は，Heimann, P. の論文を引用して，「1971 年に開催された国際精神分析学会において，攻撃性がメインテーマになり，発表者の多くは攻撃性（aggression）を破壊性（destructiveness）の意味で用いていたが，中には攻撃性（aggressivity）を高次の創造的活動への推進力に導くものととらえる人々もおり，こういった攻撃性の肯定的なとらえかたは，1923 年以後，Freud, S. が攻撃性を自我機能と関係づけたことや，

Hartmann, H. の適応的観点の導入によって，攻撃性の概念が個人の主体性（personal, initiative）に重きをおいた自己主張（assertiveness）や自己実現（self-actualization）という用語と結びついたことによる」と述べている。さらにスポーツ心理学者である Butt（1992）は，高い攻撃性を個人の強いエネルギーとみなし，熱意の表れであるポジティブなものとして位置づけている。また，Kerr（2011）は，競技者にとって強い身体接触が，楽しさや満足感の源となり，それが競技参加の動機へとつながるということをコンタクトスポーツの本質を理解している者は分かっているはずだと主張している。

これまで述べてきたように，攻撃性には二義性が認められ，スポーツ場面における攻撃行動は，諸刃の剣として作用し得る（Brown, 2000）。競技場面でのパフォーマンス向上を望むならば，攻撃行動を抑制するのではなく，攻撃性を競技の推進力へとうまく変換していくことが，より建設的で有用である。そのためにはまず，競技者が攻撃性を発現するときに，「内的には，どのような動きが生じているのか」という彼らの体験過程に迫り，理解することが重要と考えられる。このような視点は，攻撃性の処理を課題とする競技者への支援につながるはずである。

先行研究を概観すると，スポーツ場面の攻撃性を扱った研究は種々の側面から検討され，積み重ねられてきた。スポーツの攻撃性について性差（例えば，Keeler, 2007），接触の程度（例えば，Tucker&Parks, 2001），競技経験年数差（例えば，Coulomb-Cabagno & Rascle, 2006），年齢差（例えば，Mintah et al.，1999），試合の頻度差（例えば，Widmeyer &McGuire, 1997），倫理観と道徳の程度（例えば，Shields&Bredemeier, 1995），スポーツ種目差（例えば，コンタクト・非コンタクト，個人競技・団体競技）の要因から比較検討がなされてきた。しかしながら，これらの研究は，攻撃性の発現過程に直接応えるものはなく，攻撃性研究には次のような課題が積み残されていると考えられた。先行研究においては，種々の独立変数によって攻撃性の量に差があるかを検討したものが多く，どのように攻撃性が発現するか，つまり競技者の体験過程に焦点を置いた研究が存在しない。被攻撃から攻撃性発現までの過程を丹念に検討することなしには，攻撃性を建設的な達成行動へとつなげていく手がかりを得ることが困難なのは自明である。

さらに攻撃性の発現過程を検討する上で重要となってくるのが，攻撃の「意図」の課題である。Geen（2001）は「攻撃とは，ある人から他者にむけられた有害な刺激であり，その刺激が他者を傷つけるという意図を伴っており，被攻撃者はその刺激を避けたいと動機づけられるものである」とスポーツにおける攻撃を定義したが，この定義はどのように意図を測定するのかという課題を残した。スポーツ競技においては，タックルなどの攻撃行動がルール上認められているため，それが相手を傷つけようと意図したものなのか，そうでないのかが重要な視点となってくる。「意図」を測定した先行研究（e.g., Bredemeier, 1985a ; Ryan & Wimer, 1990）はごく僅かにあるが，そのほとんどが意図の有無に終始しており，意図の具体的な内容や質に関して言及がなされていない。そのため，スポーツにおける攻撃性研究に対して，包括的で力動的な攻撃行動の理解が欠如していると指摘されている（Kirker et al.，2000）。また，これまで攻撃の「意図」は，行動観察や試合時のファウル数と攻撃性の程度を測る質問紙との相関を調べるといった行動変数との関連から検討がなされてきた。しかしながら，実際に競技者の内面で何が起きているかという視点での検討はなされていない。同じ攻撃行動であっても，被攻撃から攻撃性発現までの内的過程は異なるはずである。つまり，彼らの体験過程に迫らなければ，意図の正しい理解に迫ることができない。ひいては，彼らの支援へとつなげられないのである。

こういった課題を鑑み，千葉・中込（2017）はスポーツ版攻撃性検査を開発した[注1]。

この尺度は，スポーツ場面における攻撃性を「感情の統制」「攻撃行動の表出」の２つの視座から捉え，競技者の攻撃性を「戦略型攻撃性」「達成型攻撃性」「抑圧型攻撃性」「敵意型攻撃性」の４つのタイプに判別するものであった（図 1）。[注2] しかしながら，その尺度によって競技者の攻撃性タイプを判別することはできたが，各々の攻撃性タイプにおける発現過程の詳細については検討が不十分であった。そこで本研究では，各攻撃性タイプが被攻撃的状況に置かれてから攻撃性を発現するまでに，どのような体験様式を経過するかを明らかにすることを目的とした。具体的には，各攻撃性タイプを顕著に表す競技者への面接調査を通して，攻撃性発現に至るまでの内的過程を明らかにした。このことは同時に，攻撃性を競技遂行のエネルギーに変換する要因を明らかにすることにもつながり，パフォーマンス向上への手がかりを得る研究成果を期待できるはずである。

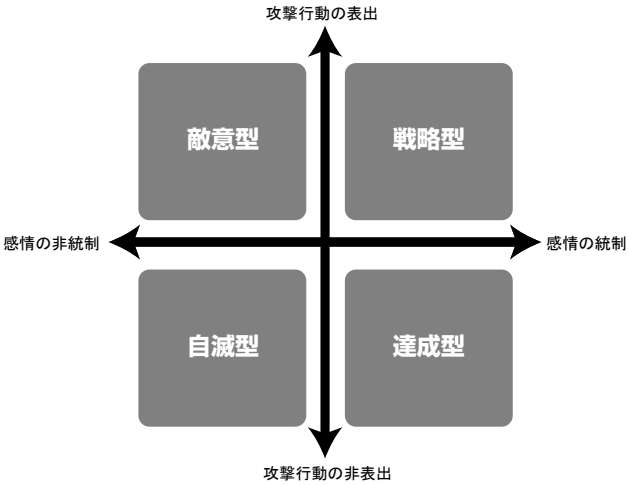

図１　４つの攻撃性タイプ（千葉・中込，2017）

2. 方法

2-1 調査対象者

ここでは4つの攻撃性タイプにつき1名，計4名の事例を提示する。この4名（男性2名，女性2名。平均年齢23.5歳）は，5つの大学における体育会運動部に所属する競技者と1つの企業スポーツ競技者241名（男性155名，女性86名，平均年齢20.68 ± 2.92歳）の中から，コーチによる判定によって各攻撃性タイプに該当した者，コンタクトスポーツ版攻撃性検査（千葉・中込，2017）によって各攻撃性タイプに判別された者である。つまり，各攻撃性タイプの特徴を顕著に表わしていると考えられ，各攻撃性タイプの典型例として位置づけられるものである。さらに，競技種目や性差による偏りが少ないよう2つのコンタクトスポーツ競技から男女1名ずつ選出した。

2-2 調査内容・手続き

調査実施に先立ち，口頭・文書により十分に事前説明を行った。なお本研究の実施にあたっては，「筑波大学研究倫理委員会」より承認を得た。面接は半構造化面接（1回60～70分×1回）で，面接の詳細について表1に示した。対象者には最近の試合の中で最も印象的に残っている相手からの攻撃場面を想起してもらうことから面接を開始した。対象者にとって最も印象に残っている体験は個人の体験様式を顕著に表すと考えられたため，その体験を手がかりに，「感情の統制」「意図」について関連する具体的な情報収集をはかった。なお，面接対象者の一般的な攻撃性を測る「BAQ得点」，スポーツ場面での攻撃性を測る「スポーツ版攻撃性尺度得点」，相手の行動に悪意を感じる程度を測る「悪意な意図の知覚得点」，攻撃衝動の統制のなさの程度を測る「攻撃衝動の非統制得点」，性別，年齢，競技種目の付帯情報を表2に示す。

表1　本面接調査における主な質問内容

最近の試合の中で、最も印象に残っている相手からの攻撃場面を想起し、その場面について詳しく教えてください。 相手はどのようにしかけてきましたか？ （身体的攻撃、言語的攻撃、敵意）
①それを受けた瞬間、どう感じましたか？
②その行為をその後、どう受け止めましたか？
③その時、どう行動しようと考えましたか？
④実際、どのように行動して、その結果どうなりましたか？

3. 事例の提示

以下の事例紹介において，本文中の「 」は選手の言葉，（ ）は補足説明，『 』は，その他の者の言葉とする。

1）事例Aの概要

【戦略型攻撃性タイプ】

性別：女性（21）E（集団，球技系）

Aは，コーチによると『すごく冷静沈着で，頭でプレイする選手』であり，4名の中ではスポーツ場面での攻撃性得点が一番低かった。Aは，最近の試合の中での印象的な被攻撃場面について，2ヶ月前（面接当時は，オフシーズンであった）の海外遠征で外国人選手と対戦した場面をあげた。Aはその試合の中での被攻撃場面について，「味方がゴールに近い所に自分が背おう感じでロングパスを出したんです。それを受けるとき，相手がそれを邪魔しようとしてインターセプトを狙って，すごい勢いで近づいてくるのがチラッと見えたんです。その選手は積極的にボールを取りにこようとする選

表2　面接対者となった選手の付帯情報

	事例A	事例B	事例C	事例D
攻撃性タイプ	戦略型	達成型	自滅型	敵意型
性別	女性	男性	女性	男性
年齢（学年）	21歳（大学4年生）	28歳（社会人6年目）	21歳(大学3年生）	28歳（社会人6年目）
競技種目	E(集団，球技系）	F(集団，球技系）	G(集団，球技系）	H(集団，球技系）
BAQ得点（M＝55.66）	60	69	59	51
スポーツ版攻撃性得点（M＝39.20）	31	36	40	44
悪意な意図の知覚得点（M＝16.60）	12	15	25	22
攻撃衝動の非統制得点（M＝22.60）	19	16	15	22

＊Mは対象者全体（N=241）から算出した。

手であることを試合の中で認識していたので，これはチャンス！と思って。というのも，そのとき相手の足が自分の頭付近に来そうだなっていうのが一瞬何となく分かったので，自分の頭をわざとちょっと近づけてファウルを誘った」と飄々と語る様子が印象的だった。ファウルプレイを誘った場面についてより詳細に聞くと，「頭付近に対する接触プレイなので結局ファウルを相手に与えて。その選手が不服そうにしていて，その後もずっと気持ちを切り替えられていない感じでした。そのこともあってか，その後，自チームの流れになって，最終的に得点につながったので良かったかなと思います」と語った。被攻撃に関して，「強い身体接触に関しては，基本的に，何も思わないんですよね。それがＥだと思うので。当たり前のことが起きているとしか思わない。それで負けてしまうのは，自分のスキル不足でしかないので。イラっともしませんね」と，強い身体接触はあくまで競技の一部として捉えているようであった。

被攻撃後の自分自身の行動についても，「普通に次のことをやるだけですね。当たり前のことをやるだけです。試合中に感情とかを表情に絶対出さないようにはしています。表情とかも次の動きが分かる要素だと思っているので」と，極力感情の揺れを表出しない様に努めているようである。「自分は相手選手の表情とか目線とかをよく観察している方で，よく見ていると，イライラしている人は，その後単純な動きしかできなくなるなぁってのが経験としてあるので。逆に相手選手がイライラしているなって思ったらラッキーって思う。それに便乗して，戦略としてそのイライラを助長するようなことをわざとやることもあったりします」と，挑発的行為をゲームの中で用いることを語った。具体的には，「その人の目の前でわざとボールを引き寄せて，とらせないようなテクニックで煽る感じですね。何度もパスしたりして絶対ボールを取らせないみたいな。相手からしたら，遊ばれてるんじゃないかって思うというか。そういうのってじわりじわりと後から効いてくるなと思っているので。あとは，試合前半でダメージを与えたプレイをもう一度やるっていうのもあります。例えば，前半で相手がファウルをとって，不服そうにしている相手に対してまた同じファウルをとらせて精神的ダメージを与えるというか。相手のファウルを誘うんですよ」と，用意周到に相手をコントロールし，攻撃性を誘発させている様子がうかがわれた。こうした余裕のある態度の背景には，自身のスキルレベルが支えとなっているようであった。

さらに，Ａは「何でも理詰めで考えるというか，感情的にはならないんですよね。例えば戦略として，審判に対しても会場に入ったときから挨拶をちゃんとしたり，笑顔でいたりして相手からの心証をよくさせようとする。全ては勝つためにやっていることで，戦略なんですよ。あと，審判の判断に文句をつけたりとか，アピールしたりとかは極力しないようにしている。そういうことをするとやっぱり審判にいい印象与えないので。それと，不服だとアピールして，それが通らなかったとき，自分もイライラするじゃないですか。だから相手に期待しないというか。それはそれとして受け止めないと，自分で自分の首しめると思うんですよね」と，一つ一つの行動を勝つためにコントロールしているようだった。

2）事例Ｂの概要

【達成型攻撃性タイプ】

性別：男性（26）Ｆ（集団，球技系）

Ｂは，『すごく全うなプレイをする選手』とコーチに評されている。BAQ 得点は４名の中で一番高いにも関わらず，スポーツ版攻撃性得点は平均を下回り，スポーツ場面ではエネルギーをうまく達成行動へと変換できる選手であることが推察された。Ｂは，幼少期からＦをはじめ，競技歴が 20 数年にも及ぶ。達成型タイプに判別されたことについて，「すごく当てはまると思いました。試合中に反則とかされてもそれもＦの一部であるから，次を考えるのが大事だっていうのを自分のなかで思うのがすごく強くて。正直何だよって思うけど，前あったことをどうこうよりも次あることをどうするかっていうのを自分で考えるようにしています。なので，自分の怒りとか感情を相手にぶつけるようなことはしないですね」と，起きたことは過去のこととして切り替え，自分自身のプレイに徹していこうとする未来思考が強いことがうかがわれた。

最近の試合の中で印象的だった被攻撃場面について，「同点で試合時間が残り 10 分。自分がボールを運んでいる時に，真っ正面から来た外国人選手に，明らかに故意に怪我をするような体の入り方をされた。危険な行為としてファウルをとられると思ったんですけど，審判がファウルをとってくれなかったんですよね」と不服そうに語った。それに対して，「正直なんだよ，って思ったんですけど，それを出す（表出する）ことは自分の中ではない。抑えますね。やられたことを競技にモチベーションにしていくようなエネルギーにしていくぞっていうのはつながるところがなくて。それが課題だなって感じることもあるんです。どうしても，Ｆはいいプレイとファウルプレイが表裏一体というか，そういったグレーゾーンを攻めて行くことが時として必要なので。でも信念としてきれいにＦがしたいってのがあって。そんなこと（不当なプレイ）を自分のプレイにつなげたくない。相手にやり返してやろうとか，やられたからやってやろうとかそういうのはあまりならないですね」と，自分と相手をうまく切り離しているようである。「競技者って自分でこれやろうと準備してきてそれを試合に出だそうとするじゃないですか。それを他人にやられたからやってやろうとか自分のエネルギーに変えたくないんですよね。やっぱりきれいにＦがしたい。そこにいきつくんです」と，自分と相手を切り離そうとする考え方の背景には，ＢのＦに対する競技観が強く影響していたようである。「だから見えない所で隠れてやる反則とかできない。Ｆでは（隠れてする反則を）やる人結構いると思うんですけど，そういうのは一切できなくて。いいのか悪いのか分からないんですけど。反則めちゃくちゃ少ないです。それはぎりぎり

のプレイを避けているってことにもなるのかなって」と，フェアプレイを求めるあまり，守りに入ってしまい，攻めきれないという葛藤が語られた。「自分はずる賢さがない。きれいに真っ当にやろうとする。ずる賢く勝ったのはなんかすっきりしないんですよね」と，B の中にはフェアプレイ精神が強く根付いているようである。

さらに B は，このような考え方の背景には高校時代の経験から強い影響を受けていると語る。「当時は，自分がキャプテンで，試合中に味方のミスに対してすごく怒ったりしていた。怒ることもしなきゃと思ってやっていた。でもすでに起きてしまったことなので，試合の中で過去のことを言っていても仕方ないし，時間がもったいない。『次どうするか考えることの方が何倍も大事だ』って監督の言葉が心に響いて，何が起きてもどんなミスが起きても，次どうするかを考えるようにしようと思って。それは普段の生活にも通じていて，怪我したときとかも何で怪我したんだろうとか落ち込んでいる暇なんてないくらい，すぐに怪我を治すための行動を始めている。それが癖になっている。そうやって切り替えている」と，競技歴を重ねる中で苦悩しながら，感情を統制できるようになった様子がうかがわれた。

3）事例 C の概要

【自滅型攻撃性タイプ】

性別：女性（21）G（集団，球技系）

C は，コーチから『プレイで慌てることが多く，一人で勝手に崩れていくタイプ』と評され，悪意な意図の知覚得点が高かった。そのため，C が崩れていく背景には，相手の攻撃を悪意と受け取る傾向が強いのではないかと推察された。印象に残っている身体接触の場面について尋ねると，6 ヶ月前に海外遠征にいった際，自分がボールを運んでいる時に，外国人選手がディフェンスしようとしていきなり足をかけてきて，身体が宙に舞った場面をあげた。「その瞬間の記憶があまりなくて。気づいたら，身体が動かなくなっていて。担架で運ばれて。宙に舞った時に着地で変に手をついたみたいで腕を骨折して。遠征 1 日目の出来事だったので，せっかく来たのに，帰国しなければならないのが，悔しくて」とその当時のことを振り返った。

自身のプレイスタイルについて，「裏をとって抜いてって感じだから，接触プレイをしないようにしているんですよね。好きじゃないというか。でも接触した瞬間は，相手に対して何も思わない。痛いなとかそんなばっかりで。もともと，フィジカルもそんなに強くないので，やられたら仕方ないって思う。ただ，一回強く当てられたら，あんまり近寄らないようにしようと思う。その人のいないサイドにいくとか。痛い思いしたくないから。つぶされそうだなと思ったら，逃げる」と，身体接触を避けることで自身の身を守っている様子が伺われた。

被攻撃場面をどう受け止めるかについて C は，「身体接触に対しては，G の一部なので，仕方ないというか。それより言語的攻撃の方が気になっちゃうかも。セットプレイとかで，相手選手とポジショニングを競り合ってるとき，『身体当ててくんなよ』っていわれて。あたかも汚いものさわるみたいなジェスチャーされて。怒りというよりも，何でそんなこと言うのか理解できなくてモヤモヤしてしまって。それで，消極的になってしまうことがある。しばらく引きずってしまって。周りからみると，なんか様子がおかしいなって思われているみたいです。相手の行為に対して本当につらいなと思ったら，タイムの時に仲間の選手に言って発散する。『ねぇねぇこんなこと言われたんだけど，おかしいよね！？』って聞きます」と，感情の揺れを自分自身で対処できず，チームメイトに助けを求めていたようである。

その後の行動について，「もやもやしてしまって，何か自分で抱えきれなくなって，いつもの自分じゃなくなる。チームメイトにも，『とりあえず落ち着け！』って言われちゃうくらい，自分を見失ってしまうことが度々あります」と，感情の揺れによってプレイが影響を受けている様子を語った。その時の感情の揺れについて詳細に聞くと，「痛いプレイとか，ひどい暴言を言われたりすると気分がモヤってなります。すっきりしないというか，引きずるというか，気にするというか。それがその後のプレイに影響してしまって，慌ててしまったりとか。周りが見えなくなって，自分自身で訳がわかんなくなってしまうんです。プレイも積極的に前にいけなくなって，腰が引けて逃げてしまったり。自暴自棄になってしまうことが多い。そういう時は，自分の動きがおかしくて上手くいかないのか，それともやっているけど戦術がはまらないのか，チームメイトに聞くようにしている」と，自分なりの対処をしているようであるが，自身で自分の状態を客観的に理解するまで至っていないようである。「自分は，プレイの浮き沈みが激しいというか。プレイの安定が課題ですね。他人に何をされようが動じないようなメンタルを持たなきゃいけない」と感情統制の課題を語った。

4）事例 D の概要

【敵意型攻撃性タイプ】

性別：男性（28）H（集団，球技系）

D は，コーチから『ファウルプレイが多すぎる。そこを何とかして欲しい』と言われており，スポーツ版攻撃性得点が高かった。なかでも，攻撃衝動の非統制得点が高く，コントロールが課題の選手と推測した。印象に残っている被攻撃場面について，リーグ戦の終盤，試合前半，3 点ビハインドの状況で，密集時相手選手が審判の死角でみぞおちに肘を入れてきた場面を挙げた。「あ，やられたって思って。あいつだなって背番号覚えて。チャンスがあったらやり返す。僕がやり返してチームにマイナスなことが起きるのが一番よくないと思っているんで，まぁやり返せたらやり返すけど，極力ばれないように。その時はチャンスがなくてやり返しませんでした」と，過去に起きたことを引きずっている様子を語った。敵意型タイプに判別されたことに対して，「基本的にやられ

たら，意図的なのはなんとなく分かるんで，あいつわざとやったんだなって風に思います。あと，グラウンドに入っちゃうと対戦相手を完全に敵とみなすんで。対戦相手に余計なこと（不当なプレイ）されたら，腹が立つ。敵意型のチャンスがあれば報復プレイを狙っているってのがすごく当てはまります」と自己分析した。

「ただ，やり返すことばっかりを考えているわけではなくて，たまたまその選手と接点があればやり返そうと思っているだけなんで。一応レフリーの目線，立ち位置とか，色々考えながらやっている」と自身に不利益を被らない様に対処している様子が語られた。Dには，過去に自身の3連続ペナルティで対戦相手に逆転負けしたという苦い経験があった。そのペナルティの詳細について，「ずっとディフェンスが続いている状態で，相手のボールを奪えるチャンスだと思って，仕掛けたところが入る角度がよくなくてファウルをとられた。次も，タイミングが微妙だなぁっていうファウル。自分のやった感覚でも映像でも，相手が上手くてとられたファウル。あともう一本は，反則があった地点で相手選手にシュートの権利が与えられてしまう，勝敗に関わるようなファウル。こうやって振り返ると『勝ちたい，相手がもっているボールをとりたい！！』といった感情がばーって前にでて，そういうときは審判の声とか笛も聞こえにくくなっていて，自分のなかのものさしだけで，ばっとやってしまう。思い込みからくるペナルティとかが多いです。だから，感情のコントロールの問題なんだと思います」とファウルプレイを振り返った。

Dはやられたらやり返すということについて，「高校生のときとか，H歴が浅かったときとか，若いときはやられたらやり返すって感じで，その場でやり返してたんですけど。それが別にプラスにならないと分かりだしたらやらなくなりましたね。限られた試合時間のプレイにすべて意図をもってやれっていうぐらいの監督の指導だったんで。それについて考えていたら，怒っている暇もないというか」と，高校時代の体験を語った。「自分は敵意型でもあるけど，戦略型よりの敵意型かなと思うんです。やり方が戦略的なので。相手をカッとするようなことしようと思うときもあって。服をばって引っ張ったりとか。あとはあの密集している場面でこの辺（首）をぐっと押さえたりとか。無理矢理相手を引きずりこんで，離していいときも離さずとか。まぁみえないところでそういうのをちょいちょいやったりとか。でも，報復感情があるので，それは許せてないってことなんだなって気づいて。そういう部分では，やっぱり敵意型かなと。たまに，計画的にやっているつもりが意外と審判がみていて声をかけられたり。もうちょっとまわりをみてないとなって思ったりします」と，報復感情を戦略的に表出しようとするも，上手く対処できていない様子がうかがわれた。

4. 考察

ここまでに提示した事例について検討すると，各攻撃性タイプによって，被攻撃から攻撃性発現までの内的過程が異なっていることが読み取れた。以下にその詳細について考察した後，攻撃性を建設的な達成行動へと結びつけるための要因について検討する。

被攻撃から攻撃性の発現までの内的過程の流れを図2に示した。これをみると，「統制」の段階では，自身の攻撃性を建設的に競技遂行へと変換している「達成型」「戦略型」の競技者は，被攻撃に対して「基本的に何も思わないんですよね，それが競技だと思うので。当たり前のことが起きているとしか思わない」（戦略型），「正直なんだよって思うけど，それを抑える」（達成型）と語っているように，自身の感情が統制されていた。ただ，「統制ができている」（統制有り）と言っても，両者からは質的に異なる様子が浮かび上がってくる。「戦略型」のAは，被攻撃に対しては，「何も思わない」と動じることのない一方で，「達成型」のBの「正直なんだよって思う」という語りからは，被攻撃に対して感情の揺れはあるものの，それを努めて「統制」している様子が伝わってくる。どちらも統制できることに変わりはないが，そもそも「感情の揺れを感じない」のか「感情の揺れを感じるが統制する」のでは，意味が異なる。この辺りは，「戦略型」「達成型」によって規定されるのではなく，「戦略型」の中にも「感情の揺れを感じるが統制する」という内的過程を経る競技者もいるはずであり，ここには個人差が生じていることが想定できる。この点については，今後より多くの競技者への面接を積み重ねる上で慎重に検討していくべき課題である。さらにこのような知見は，タイプを判別する時点ではみえていなかった事項であるため，面接調査の意義を確かめることにもなった。

一方，自身の攻撃性を建設的に競技遂行エネルギーにつなげられていない「自滅型」「敵意型」の競技者は，被攻撃に対して「言語的攻撃に対して何でそんなこと言うのか理解できなくてモヤモヤする」（自滅型）「あいつわざとやったんだなって思うので，背番号を覚える」（敵意型）と，過去に起きたことを引きずっている様子が共通して読み取れた。しかしながら，Cからは「感情を統制することの重要性」について語られることはない一方で，Dは「感情のコントロールの問題なんだと思います」と，「感情の統制」が課題であることに自身で気づいているようであった。このように，自身の攻撃性に対して建設的な対処ができない競技者は，「感情の統制の重要性」に気づいていない者と，気づいているがそれを課題とする者がいるようである。この両者に対して支援する場合，異なったアプローチが求められるはずである。

次に，「攻撃行動の表出」（意図）の段階では，自身の攻撃性を建設的に競技遂行のエネルギーにつなげている「戦略型」のAは「相手にイライラを助長するようなことをわざとする」と述べた一方で，「達成型」のBは「やられたからやり返すとか自分のエネルギーにしたくない」と語った。ここでの両

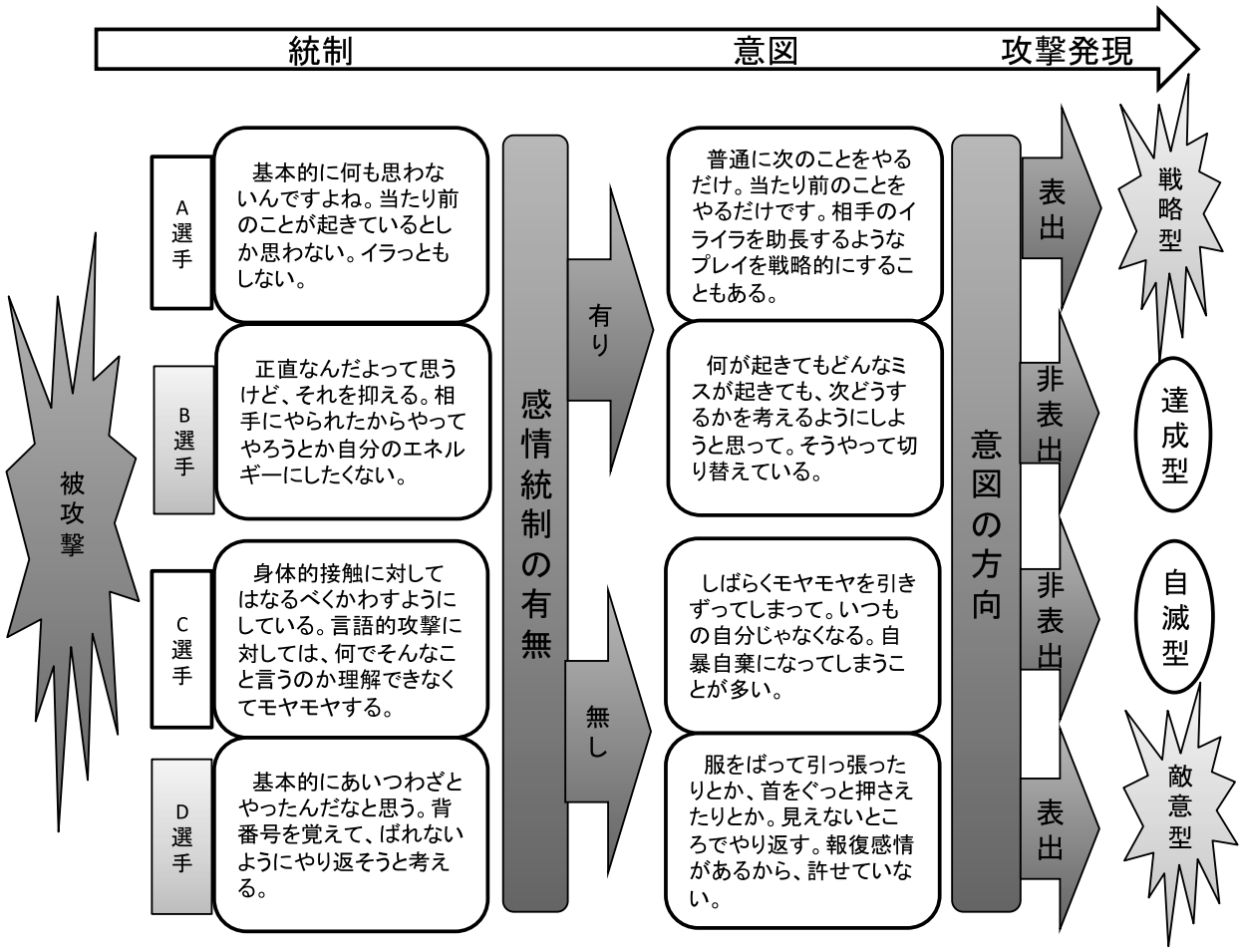

図２　各攻撃性タイプにおける攻撃性発現までの内的過程

者の違いは，前者は意図を相手に向け，行動として攻撃性が表出している一方で，後者は攻撃意図を相手には向けず，自分自身のプレイに徹する様に，相手と自分をうまく切り離し，直接攻撃性の表出には至っていない。前者においても審判に対していい印象を与えるといったように，ファウルプレイではなく「ずる賢さ」として攻撃性がポジティブに機能していたようである。攻撃性をパフォーマンス（演技）として表出させるのは，スポーツ特有のもの，競技特性によるものかもしれない。

他方，自身の攻撃性を建設的な競技遂行へと変換できない「自滅型」「戦略型」の競技者は，「しばらくモヤモヤを引きずってしまう」（自滅型），「報復感情があるから許せていない」（敵意型）といったように，過去に起きたことを引きずっていることが分かる。前者は攻撃性を自身の中で抱え続けてしまい，動きが滞ってしまう一方で，後者は他者に自身の攻撃性を表出している様子が伺われる。しかしながら両者とも，ファウルプレイにつながりやすいという点では，競技者として不利益を被りやすい状況を生み出し，自身の攻撃性を建設的に活かせていないようである。

これまで述べてきたように，「感情の統制」の段階では，自身の攻撃性を建設的に競技遂行エネルギーに繋げている「戦略型」「達成型」の競技者は，「当たり前のことだと思う」「自分のエネルギーにしたくない」とした一方で，そうでない「自滅型」「敵意型」の競技者は「こいつわざとやったんだな」「なんでそんなこと言うんだろう」と語っていた。これらから，自身の攻撃性を建設的に競技遂行エネルギーにつなげるためには，「相手の意図に対する認知」が重要であることが示唆された。先行研究において，攻撃行動の背景にパラノイド認知や敵意的帰属の存在が明らかにされている（大渕，1993）。パラノイド認知とは，他者の言動の背後に，自分に対する悪意や敵意を推測しやすい傾向のことを言う。つまり，相手の攻撃を「自分を軽視しているからだ」や「自分

に対する嫌がらせだ」と考えてしまい，怒りの感情を誘発する状況を自ら生み出している。本研究は，大渕の指摘したパラノイド認知を支持し，日常場面のみならずスポーツ場面においても「悪意な意図の認知」は，攻撃性を誘発させることが明らかになった。

また，「攻撃行動の表出」の段階では自身の攻撃性を建設的に競技遂行のエネルギーにつなげている「達成型」「戦略型」の競技者は，「とにかく次のことを考える」「何も思わない」とした一方で，そうでない「自滅型」「敵意型」の競技者は「背番号を覚えていてチャンスがあれば報復する」「あせってしまってプレイが崩れる」と語っていた。これらから，自身の攻撃性を建設的に競技遂行エネルギーにつなげるためには，過去に囚われない「未来への視点」も重要であることが示唆された。

5. まとめと今後の課題

本研究は，自身の攻撃性を達成行動へとつなげるための要因を明らかにすることを目的とした。被攻撃から攻撃性発現までの内的過程について各攻撃性タイプを顕著に表した競技者に対して面接調査を実施した。その結果，「統制」の段階では，「悪意な意図の認知」が，そして「意図」の段階では，「未来への視点」が抽出された。つまり，自身の攻撃性を競技遂行エネルギーにつなげるためには，相手の攻撃に対して「悪意」を読み取らないこと，そして過去に囚われず，常に先のことを考えるという「未来への視点」が重要であることが示唆された。

今後の課題として，より際立った各攻撃性タイプを表す競技者の被攻撃から攻撃性発現までの内的過程の記録を積み重ねていくことで，各攻撃性タイプの臨床像をさらに明らかにしていくことが求められる。そして，介入研究の実施が求められる。介入実施にあたっては，本研究で明らかになった「感情の統制」と「攻撃行動の表出」の背景となる「悪意な意図の認知」および「未来への視点」の要因が，一つの手がかりとなる。これらの要因を手がかりにすることで，介入前後において競技者の攻撃性の表出の変容が認められるはずである。具体的な方策については今後も慎重に検討を重ねていきたい。さらに，どのようにこの２つの視点が学習されるのかについても生育歴，競技環境要因等から探求していかなければならない。これらの課題を克服することにより，パフォーマンスの向上に寄与する成果が得られると考えられる。

付記

本研究は，著者らが日本スポーツ心理学会第43回大会において口頭発表した「スポーツ版攻撃性投映尺度の汎用性を目指して」を加筆修正し，纏めたものである。

注

1）スポーツ版攻撃性検査の概要を以下に示す。なお詳細については，千葉・中込（2017）を参照されたい。図３は使用した図版の一例である。いずれの図版にも主要な２人の競技者が描かれ，一方の選手が他方の選手に向かってコンタクトプレイをしている，ないしはコンタクト直前の様子が表現されている。対象者には，この図版を呈示し，以下のような教示を与えた後，自由記述による回答を求めた。「以下のような状況（被攻撃状況）の中で，あなたは何を思い，どのように考えるでしょうか？想像でかまいませんので，その心の動きと行動に注目して，以下の質問に答えてください。あなたは今，対戦相手であるＡ君（さん）と競り合っています。力関係は互角で，お互い一歩も譲ろうとしません。そんなときＡ君（さん）が背後から突進し，

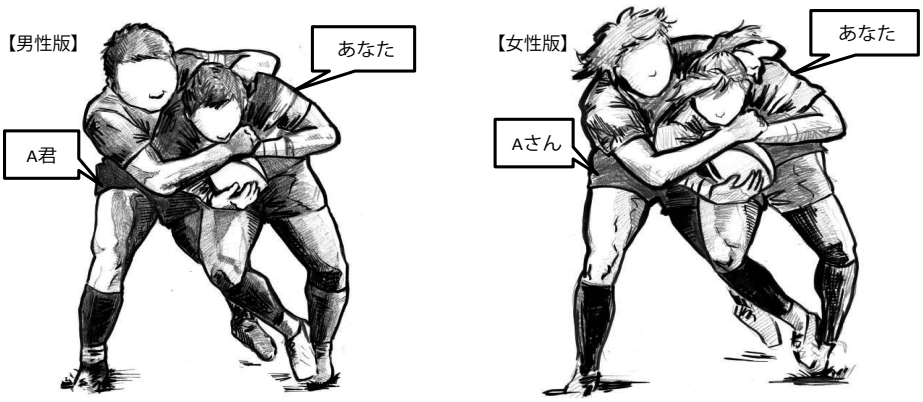

図３　使用した図版の一例

ボールを奪おうとしてきました。それによって，A君（さん）と強く接触し肘に今までの人生で味わったことのないような激痛が走りました。「①あなたは今，A君（さん）の行為に対して率直にどう感じていますか？②A君（さん）の行為をどのように受け止めますか？③これからどうしようと考えますか？④実際にどう行動しますか？」身体的攻撃以外の具体的内容は以下の通りである。「あなたの耳元で舌打ちをしてきました（敵意）」，「あなたを侮蔑するような言葉をいってきました（言語）」。

2）この検査によって判別される4つの攻撃型の詳細は，次の通りである。「戦略型攻撃性」（感情の統制・攻撃行動の表出）は，感情は統制できているが，相手に意図を向ける攻撃性である。例をあげると，「ゴール前でシュートを決められそうだったため，わざとファウルをし，チームに有利になるようファウルをとる」等が挙げられる。「達成型攻撃性」（感情の統制・攻撃行動の非表出）は，感情が統制されており，相手と自分をうまく切り離して，自分自身に意図を向ける攻撃性である。例をあげると，「よくあることだから仕方ないと切り替えて，自分自身のプレイに徹する」等が考えられる。「自滅型攻撃性」（感情の非統制・攻撃行動の非表出）は，感情がうまく統制できずに，それを内側に溜め込んでしまい，求められるプレイの実現を阻害している攻撃性である。例をあげると，「イライラしてしまい，いつも通りの自分自身のプレイができなくなる」等が挙げられる。「敵意型攻撃性」（感情の非統制・攻撃行動の表出）は，感情を統制できず，相手に危害・苦痛を与えようとする攻撃性である。この攻撃性は，「腹が立って，報復プレイをする」等の例が挙げられる。

引用文献

Abrams M.（2010）ANGER MANAGEMENT IN SPORT – Understanding and Controling Violence in Athletes – . Human Kinetics: Australia.

安立奈歩（2003）攻撃性に関する先行研究の概観 . 京都大学大学院教育研究科紀要 , 49 442-454.

Bredemeier, B. J.（1985a）Professionalization of attitudes toward play in children and adults.Research Quarterly for Exercise and Sport 56 82-83.

Brown, N. J.（2000）Aggressive and Assertive Behaviors of Rugby Players. Thesis of Master of ArtsSchool of Physical Education. University of Victoria.

Butt, D. S. & Cox D. N.（1992）Motivational patterns in Davis Cup University and recreational tennis players. International Journal of Sport Psychology 23 1-13.

千葉陽子，中込四郎（2017）スポーツ版攻撃性検査の開発. 臨床心理身体運動学研究 , 19（1），51-66.

Coulomb-Cabagno, G. & Rascle O.（2006）Team sport' s players observed aggression as a function of gender competitive level and sport type. Journal of Applied Social Psychology 36 1980-2000.

Dehghani, M & Behtaj, A.（2012）The comparison of aggression of football players in different positions. Ovidius University Annals, Series Physical Education & Sport Science, Movement & Health, 12（2）, 314 -319.

Geen, R. G.（2001）Human aggressiveness. Milton Keynes. UK: Open University Press.

Keeler, L. A.（2007）The Differences in Sport Aggression Life Aggression and Life Assertion Among Adult Male and Female Collision Contact and Non-Contact Sport Athletes. Journal of Sport Behavior 30（1）57-77.

Kerr, J. H.（2004）Rethinking aggression and violence in sport. London : Routledge.

Kerr, J. H.（2011）Experiencing aggression in sport: Insights from a Lacrosse world championship tournament. Sport and Exercise Psychology 7（1）26-33.

Kirker, B.Tenenbaum, G. & Mattson, J.（2000）An investigation of the dynamics of aggression: Direct observations in ice hockey and basketball. Research Quarterly for Exercise and Sport 71 373–386.

B. クラーエ著 秦一士，湯川進太郎編訳（2004）攻撃の心理学 . 北大路書房 .

Mintah, J. K. Huddleston S & Doody S. G.（1999）Justification of aggressive behavior in contact and semi-contact sport. Journal of Applied Social Psychology 29 597-605.

大渕憲一（1993）セレクション社会心理学－ 9 人を傷つける心 －攻撃性の社会心理学－ . サイエンス社.

岡田督（2001）攻撃性の心理 . ナカニシ出版 .

Ryan, K., Williams, J.&Wimer B.（1990）Athletic aggression: Perceived legitimacy and behavioral intentions in girls' high school basketball. Journal of Sport and Exercise Psychology. 12, 48-55.

Shields, D. L. L. Bredemeier B. J. L.（1995）Character development and physical activity. Champaign IL : Human Kinetics.

Tucker, L. W. & Parks J. B.（2001）Legitimacy of aggressive behaviors in sport. Sociology of Sport Journal 18 403-413.

Widmeyer, W. N. & McGuire E. J.（1997）Frequency of competition and aggression in professional ice hockey. International Journal of Sport Psychology 28 57-66.